古文書の勉強

滝　沢　由美子

「お母さんは，これから出かけて来ますから。」，「えーっどこへ。」と，ちょっと不安顔の小2の長女。「勉強よ。」，「ああ古文書ね。後はちゃんとやっておくから，いってらっしゃい。気をつけてね。」と，口うるさい母親が居なくなるので嬉しそうな小6の長男。「なるべく早く帰って来てね。」。こんな会話を時々して，夜7時から始まる古文書の勉強会に，今は少なくとも月2回は出席しています。一年程前までは，子供を友達のお母さんや実家などに預けたりするため，都合をつけるのにちょっと神経を使いましたが，今は夜でも4時間位なら2人で留守番をしているようになり，大分楽になりました。

古文書の勉強を始めたいと思ったのは随分前で，長男が生まれてまだ間もない頃でした。その後しばらくは毎週決まった曜日の夜に外出するためには，かなり無理をしなければならなかったので諦めていたのですが意を決して始めてから中断しながらも，5年になります。

初めに勉強したのは身近な，武蔵野市内にある文書が中心でしたので，近世地方文書（ちかたもんじょ）のみ勉強しました。武家文書も勉強会に誘われ，その機会には恵まれているのですが今のところ，そこまでは手がまわらず残念に思っています。しかし，私の興味はやはり地理学に関した事柄なので，身近な地域の文書には興味深く思う点が多々あります。新田開発や用水，水車のこと，吉祥寺村に含まれていた御林（おはやし）（幕府直轄林で，現在の井の頭公園）のこと，農間渡世，江戸府内の下肥買い受け，野菜などの産物，富士講のこと，この地域一帯の名主層をまき込んだ御門訴事件のこと等々，具体的な事柄だけでなく，当時の近郊農村の様子や農民がどのような立場に置かれていたのかなど，認識を新にすることが多く，ますます勉強をしたいと思うのです。現在は，その勉強会で『慶應慢録』を読んでいます。系統立った一つの書物ではなく，今日の週刊紙のようなものです。従って，辻斬り，刃傷沙汰，駆け落ち，火事，珍しい大亀の記事などの軟い内容から，政治，経済，外交等々の硬い内容のものまで色々ですが，中には歴史的に見て非常に重要であると思われる達書などの記事，私自身が興味を覚える地震，開発，開港，税などについての記事もあります。これらの記事を読んでいくと，江戸幕府の統治力が大分弱まって来た幕末の世相がとても良くわかり，もっと読み進めればその時代を深くとらえられるようになるのではないかと思っています。

かつて本誌に書きましたが，地籍図に関する勉強も少しづつ続いています。両方とも実際の資料にあたることが前提になりますが，これらの勉強を通して痛切に感じることは，実際の資料を良く吟味することが重要であること，読みづらい古文書や文字を解読した段階で，その記録をそのまま鵜呑みにしてしまいがちだということです。たとえば，ある村の田畑や林の面積についての記録を例証として用いることがありますが，この場合も実際の面積はどの位であったのか吟味することは必要です。同じ村の中でも，1反歩という面積が，馬の入れる所に比べると入れない山つきの所は実際には2倍，時には10倍もの広さをもっていたり，地域によって，測量に用いた基準尺が異なり，同じ1間でも長さに初めから差があったりという実例が散見されるからです。知識をどんどん吸収していく時，特に学生時代は今から考えると，歴史，経済，社会，外国事情などに関する書物や論文を読んでもそのような点にまでは注意が向きませんでした。実際，資料にあたる事の大切さは当然ですが，さらにその資料の吟味となると，労力もかなり費さねばならないためか，そこまでは注意が払われていない例も見られます。今は遅々とした勉強ですが，上で述べた資料吟味の重要さを理窟ではなく，はっきり認識出来たことは自分にとって大きな収穫であったと思っています。それに，以前はミミズののたくった様な字と写るだけ

で初めから読むのを諦めていた（諦めざるを得なかった）のが，今は展覧会や資料館などに行っても，まだすんなり読める程実力はついていませんが，楽しんで読もうという気になります。これは確実に古文書の勉強のお蔭で，それだけでも単純に，勉強していて良かったなと思っています。また，原典にあたっての細かい，しかし地道な積み重ねが生きてくる仕事であるだけに，女性に，特に地域を広く把え，地図を見ることの出来る地理学を学んだ女性には（細切れの時間しかもてない主婦にも），視野の広さを失いさえしなければ向いている勉強の一つではないかと思えるのです。

（本学非常勤講師）

距離とは ——直線距離・時間距離・心理距離——

正 井 泰 夫

地理学にとって距離は最も重要な尺度の一つである。もっとも，地図を使わない地理的研究もあるので，その場合には，距離はあまり問題にならないかも知れない。だが，たいていの場合は，距離の分る地図が使われたり，たとえ地図が使われなくても，距離というものが，その研究や観察の中で重要な地位を占めている。

ところが，一口に距離といっても，それにはいろいろなものがあるらしい。一番分りやすいのは直線距離だろう。東京とニューヨークの間の距離はと聞かれれば，地理的素養の少しでもある人なら，その間の大圏コースの11,000キロと答えるだろう。東京と大阪はと聞かれれば，さて約500キロだったかなと考える。実際には直線で約400キロだ。しかし，新幹線だと500キロと少しである。鉄道距離や道路距離は，直線距離より長いことが多いが，それでも何倍も違うということはそれほど多くない。もちろん，チベットのような高山に行けば，直線距離と道路距離はあまり違わないなどとはいえない。

ややこしいのは時間距離だ。時間のかかりかたによって，距離感があまりにも違ってしまう。東京の街はものすごく広いと感じている人が多いが，これはむしろ時間距離があまりにも大きいためにそう思ってしまうためらしい。真夜中，もし時速100キロぐらいで東京の街中を走ったとすると，東京駅と新宿駅の間は10分もかからず，数分である。直線距離の６キロ弱を，中央線の電車はどういうわけか10キロ以上も延長して走っている。所要時間は快速でも15分ほどかかり，各停だと20分以上かかる。６キロ弱という距離は歩いても１時間半あれば十分である。速い人なら１時間もあればよい。電車を待ったりしている時間を考えると，中央線各停電車と歩く人の速さは，２倍ちょっとの差に過ぎない。

心理距離は，時間距離によってその一部がつくられるが，実際には情報量の多い少いによって大きく形づくられる。未知の国は何となく遠く感じるが，よく知っている国は，心理的に身近かに思える。その結果，うっかりすると直線距離まで短かく感じてしまう。

心理距離というものは，たいへんにややこしい。地域名のつけ方によっても変ってしまう。インドはアジアにあるので，かなりの日本人はインドはそれほど遠い国でないように思っている。だがデリーまでの距離は直線で6,000キロで，ハワイとほぼ同じだ。時間的にはもっと遠い。たいていの飛行機はバンコク経由なので約8,000キロもある。カリフォルニアまでの距離だ。だが，アジアの国，それも西アジアではなくて南アジアの国というと，あまり離れていないような気もする。

若い人にとっては，インドとカリフォルニアは，後者の方がずっと近く感じているだろう。同じ時間をかけて飛んでいっても，よく知っている土地はそう感じるからだ。行かないで，日本で考えていると，カリフォルニアはもっと近い。

チベットは4,000～5,000キロなのだが，たいていの日本人にとっては，心理的にたいへん遠いところだ。日本の長さが3,000km以上あるのだから，それほど遠いところでもなく，また九州や沖縄か